刊された．会社はAsahel JonesとSamuel Stockton White，そしてJohn R. McCurdy，以上3人の共同経営である．営業担当だったMcCurdyが編集も担当して，6巻まではひとりで一切合切を切り盛りし，7巻（1853年10月）からはJohn DeHaven Whiteが編集に加わっている．彼はあとに続くDental Cosmosでも，編集長として引き続きリーダーシップを発揮しており，J. H. McQuillenやG. Z. Ziegleらニ人の編集協力者を得ている．以後会社はS. S. Whiteひとりの個人経営になったり，また当人が他界してからは株式会社組織になったりするが，Dental Cosmosに対するバックアップは揺るがず，編集者はJames W. White，Edward C. Kirkと引き継ぎ，さらに第4代編集長，L. Pierce Anthonyに受け継がれ，ここでJournal of the American Dental Associationへと合流していった．

同時代には，比較的短命に終わった歯科の雑誌が散見される．しかしながら，このDental News LetterそしてDental Cosmosは，しっかりとバックアップする企業があって，それでいてPR誌でなく学術誌として高い評価を得ていたことが，特筆される．

なお「雑誌誌名変遷マップ」は，その後確かにDental News LetterをDental Cosmosの前身誌と認め，加筆訂正されていたことを，併せて報告する．

21）明治前における下顎脱臼整復について

On Reduction of a Dislocated Mandible before the Meiji Era

大垣女子短期大学　下総　高次

Takaji Shimoosa, Ogaki Women's College

森　鷗外は，明治14年に東京大学を卒業して父親の医院を手伝っていた頃の回想小説「カズイスチカ」を，明治44年2月「三田文学」上に発表した．患者は顎が脱れた20歳ばかりの青年で，近所の医者に見て貰ったが，嵌めてくれなかった．鷗外こと花房は，両側性下顎脱臼と診断する．両手の拇指にガーゼを厚く巻いて，それを口に挿し入れ，顎を見事に嵌めてしまった．「解剖を知ってをる丈の事はあるのう，始めてのようではなかった．」と父親が微笑む．患者が帰ってから，またこう云った．「下顎の脱臼は昔は落下風と云って，或る大家は整復の秘密を人に見られんように，大風呂敷を病人の頭から被せて置いて，術を施したものだよ．骨の形さえ知ってゐれば，秘密はない．皿の前の下へ向いて飛び出してゐる処を，背後へ起させる丈の事だ．学問は有難いものぢゃのう．」以上は近代と前近代の治術が，端的に対比されていておもしろい．そこで今回は，明治前における下顎脱臼整復について，その特徴的な事項を報告する．

星野良悦＜宝歴3年（1753）～享和2年(1802)＞：広島の生れ，父の後をつぎ，つぎ医を営んだ．或る一人の病者が落下頦（下アゴ脱臼）の治療を求めてきた．良悦も他の医者たちも施す術を知らなかった．そこで，安芸にあって手術が精妙と言われた瘍医田口道長に依頼した．道長は病者を部屋の隅に連れて行き，大きな布を病者と一緒に被り，他人にその手法を観せずに治してしまった．良悦は非常に憤慨すると共に，このような症例は内景を観察する他はないと判断し，藩に願って刑屍を得て解剖し，下アゴの骨肉連接の状態を詳しく検討して，顎関節脱臼整復法を自得した．後，工人　原田孝次に頼んで，人体模型を完成した．寛政5年（1793）これを杉田玄白，大槻玄沢，柱川甫周らに見て貰い，その功妙さを賞賛された．良悦の医術は，人体解剖と木骨模型の知識をもって，外科施療に新生面を開き，当代医家中の異彩とうたわれた．

二宮彦可＜安政元年（1754）～文政10年(1827)＞：石見浜田藩の医員．長崎で西洋医方を吉田耕牛に学び，後に吉原元棟＜寛政（1790）の頃，拳法から整骨の法を工夫，「正骨要訣」を著す．＞の門に入り，正骨術を習得した．これを患者に験すること10余年に及んで其の術を極め，文化5年（1808）「正骨範」2巻を著した．これが本邦に於て「正骨科」という外科の一派を開く基となった．下顎脱臼の整復法としては，

1．探珠母法：まず患者を坐らせる．助手は患者の後ろに膝まずき，両手で患者の両頬をしっかりと把持し，手首で患者の頭部が動かないようにする．術者は患者の前方に膝をつき，両手の拇指

を患者の口の中に当てがい，両手の4本の指は顎の底を支える．ついで，力をこめて下顎を喉の方向にむかって押しつけ，同時に下顎を上方に突きあげると，関節は元のように納まる．

2．探珠子法：患者と助手の坐り方は，母法と同じ．術者は患者の前に坐し，左手首で患者の右頦（アゴ）をしっかりと保持して，頭部が動かないようにし，右の4本の指で顎骨の一番奥にある歯牙のところを探り求め，拇指を起して口角の外面に当てる．ついで母法と同じやり方で，力をこめて患者の下顎を上方に押しあげる．

各務文献＜明和2年（1765）～文政12年(1829)＞：大阪の人．筋骨の構造の基本を知るために，10数回にわたる刑屍体の解剖を行った．その資料を元に木造骨骼を完成し，治療器械を創製したり繃帯の法に創意工夫して，治方に用いること10有数年，遂に整骨を以って一家を成した．文化7年（1810）「整骨新書」3巻を著し，今日における「整骨外科」の基である「整骨科」の地位を樹立した．

船越敬祐：米子の医生．文政10年（1827）「妙薬奇覧」を著す．僻地山野では医者に乏しく，良医を迎える力もない．売薬は徒らに価が高く，贋物や無益の薬が多く，廃人となったり非命に死す者が多い．これを救わんとして，諸家の禁方や奇方の内から，手近く求め易いものを撰出したのが本書である．

解頤（おとがいはずれ）を治する法：ほうかむりさせて，口の一寸ばかりあくくらいに，ゆるくさせて，こよりにて鼻の孔をこそくれば，嚏をすべし，必ず頤（おとがい）入ること奇妙なり．

水野沢斉：養生弁＜天保12年（1841）刊3冊，嘉永4年(1851)刊　後編3冊＞を著す．

落下風の治法：椒目または瓜帯にてもよし，右一味細末にして，煙管竹の如き管に入れ置き，病人の膝を固くもちて動かざるようにし，かの管中の薬を鼻より吹き入れば，くさめの出る拍子に治るなり．

骨折や脱臼などは，古来，按摩や骨つぎなどの民間療治の領域であった．その人達は，自家の職を維持するために，治術を秘して固く守り続けたので記録に乏しい．しかし江戸中期になると，鼻の孔をこそぐって「くさめ」をさせる如き，ユニークな民間療治書も出た．他方，屍体を解剖して骨骼や顎関節の形態を研究し，医学的に治療を試みた「整（正）骨科」の人達が現れた．そして10年余にわたる其の成果を書物にして刊行し，論説・治術を公けにしたことは特筆すべき事項である．

22）最後の高等学校

On the Last Higher School

浜松市　水川　秀海

Hidemi Mizukawa, Hamamatsu City

占領下で医療行政の改革を担当したGHQ公衆衛生福祉局(以下PHW)のサムスは野心的でドラステックな改革を次々と断行して改革は医療行政の分野にとゞまらず教育の分野にまで及んだ．元来教育改革の担当は民間情報教育局（以下CIE）であった．CIEが教育改革の指針としたのは第一次米国教育使節団の報告書であった．この報告書で高等教育に関しては初・中等教育の分野と異なり抜本的改革の具体的提言がなされてなかった．そこでCIE以外の部局（PHWや経済科学局等）がそれぞれの思惑から高等教育の分野に口を出した．占領下の教育改革はCIE・文部省・教育刷新委員会のラインだけで政策形成されたのではなく他のGHQのセクションとのかゝわりで政策形成が行われていた．当時文部省にいた村山松雄氏は「特に思い出すのはPHWの指示で医学，歯科医学教育に関する注文がCIEを飛びこえて直接文部省にきた」と証言している．こうして教育改革のうち高等教育，特に医・歯科医学教育の改革は複雑となったが，日本側はこの問題を教育刷新委員会と大学基準協会で受け止めて討議し，新しく構築された日本の教育システムの中に収めた．

サムスの基本方針は学校の標準的レベルを定め，すべての学校をそれ以上のものにする．これを実現さす方法は米国の歴史に学びフレクスナー改革に倣うというものであった．歯科教育審議会が発足して標準的レベルの審議が行われる一方で文部省視学委員の調査が行われ学校のランク付がなされた．そして昭和25年までに水準に達することが困難とランクされた学校の廃校が決定した．日本の占領は間接統治であったので文部省視学委員等の日本側が表に立っているがその背後に強大